

美濃国竜泰寺所蔵の門参資料について（上）

石川力山

一

日本の中世における禅思想展開の軌跡を究明する方法としては、従来、各禅僧の語録や法語・史伝書の類を中心に論じられることが多かった。しかし近年、これらの資料に加えて、従来、禅宗史研究には殆んど用いられることのなかった禅籍抄物資料が、中世禅思想史解明の貴重な文献として改めて見直されて、原典の影印覆刻も次々に行われている。⁽¹⁾ ここにいう禅籍抄物資料とは、禅僧の語録や禅宗の綱要書及び公案等を注釈したものである。⁽²⁾

さて、これらの抄物資料は、文体の上から大別すると、漢文体で書かれた漢文抄物と、和文・口語体で書かれたカナ抄物の二種類になるが、このうち、概して漢文抄物の方がカナ抄物より早い時期に出現しているようである。⁽³⁾ また、資料の内容から大別すると、禅宗の語録や綱要書を講義提唱したも

のを、聴聞にあずかった人が聞き書き筆録して伝え、さらにこれが転写されたものと、公案禅・看話禅の流行にともなつて、公案参究を通過するための著語等の方法を問答体で記録した門参（あるいは本参・秘参ともいい、臨済宗では密参録・密参覚帳・密参箱・行巻袋等とも称する）の二種類になると思われる。ただし、特に曹洞下で古来、切紙と称して、師資伝授の秘訣を記した一枚物の文献が多数伝えられており、これも公案参得の門参と同様に、同じ門派の師から弟子へと相承され、またこれが小冊子の形にまとめられることもあったので、これら切紙の類も、門参資料の一種として扱って大過なきものと考えられる。

これらの禅籍抄物資料の中で、特に提唱の席に連なつて、その講義を聞きながら筆録したと思われる、聞き書カナ抄物は、口語や俗語、さらには地方語までそのまま筆録されていて、臨場感に溢れた講義の雰囲気をよく伝えており、このよ

うな傾向は洞門抄物に顕著で、国語学の分野で、中世から近世にかけての、関東語の研究には欠くことのできない、貴重な文献資料となっていることは周知の如くである。また、公案通過の虎の巻ともいふべき門参類も、その多くはカナ書きの問答体で記されており、やはりカナ抄物の一種と見なされて、国語学の分野で重要視されている文献資料である。⁽⁴⁾そして、これら門参資料は、禅宗各派で独自のものが成立し、その派において、一種の印可証明の助証として師資相承された。⁽⁵⁾

本論は、美濃国（岐阜県）関市下有知祥雲山竜泰寺に襲蔵されている禅籍抄物資料のうち、四種類の門参を基礎資料として、これを検討・考察し、中世禅宗思想史解明の端緒を見出さんとするものである。

二

所で、我国の真歇清了下の曹洞宗は、入宋して如浄（一一六三～一二三八）に参じた道元（一二〇〇～一二五三）によって伝えられたものであるが、道元が挙唱した禅は、大陸宋朝の禅とはかなり異質な、道元独自の思弁の展開があった。道元の禅が中国直輸入の禅ではなく、中国禅の日本的展開があったといわれる所以である。すなわち、道元の禅は、中国宋朝禅界の一般的傾向であった、公案・話頭の参得を否定する、

黙照⁽⁶⁾・只管打坐・本証妙修・修証一如等の言葉で特徴づけられる禅である。⁽⁷⁾しかし、その後の道元下の曹洞宗において、道元が目差した禅が法孫達に忠実に受け嗣がれたかどうかという問題になると、否定的な見解が多数を占めている。勿論、一部の法孫の間では、『正法眼蔵』の謄写・再編集などが続けられ、道元禅の純粹性に生きようとする努力がなされていたことも事実であるが、大勢としては、むしろ逆に、臨濟宗の中の大応派や幻住派などの林下と呼ばれる、五山派叢林には属さず、主に地方に展開伝播した派下の禅と全く異なることのない、看話禅・話頭禅の流行となり、そのため、公案参得の虎の巻である門参資料が多数出現することになったとされるのが今日の一般的な見解である。そして、道元下の曹洞宗における公案禅援用は、古く通幻寂靈（一二三二～一三九一）や峨山韶碩（一二七五～一三六五）、さらには瑩山紹瑾（一二六八～一三三五）にまでさかのぼることができるとされている。

その意味においても、中世禅界を、臨濟宗に対する曹洞宗という機械的・表面的にとらえる理解の仕方よりは、中央の官寺機構に直接つながる五山派叢林に対し、地方に分播した林下というとらえ方が妥当であるとされる玉村竹二氏の主張⁽⁸⁾は、思想的に見ても示唆に富んだ御指摘である。

では、果して道元下の曹洞宗では、道元の主張した禅は忘れられ、臨濟禅と全く異なることのない公案禅・話頭禅一辺倒

になつてしまつたのであろうか、またその公案禅援用の実態はいかなるものであつたのか、次に問題になる。確かに玉村竹二氏が指摘される如く、歴史的現象としては、公案禅が曹洞宗においても多に流行し、これが師資相承の場でも重要な位置を占めるようになり、門参の内容も、林下の密参録のそれと異なる所のないものが多く存する。しかし、たとえば、本論で問題とする竜泰寺所蔵の門参資料の中の『宗門之一大事因縁』と題する冊子の冒頭には、

曹洞宗乗者石頭一派、我カ先祖達磨圓覚大師ヨリ、第六世惠能大師五祖ノ弘忍於ニ会裡ニ確旁行者トナル、昼夜ニ此事ヲ拈得ノ、喫茶喫飯ノ隙ニダモサシクコナシ、工夫順熟ノ自然ニ根本智ニ透入ス、透入シタト云テ凡境ヲ打破シテ透入スルニアラス、ソットモ境界ヲ損ザムズ心智ニ當得ス、心智ト者ハ不思善不思惡本来ノ面目ヨ、青原既ニ得ニ此旨、六祖々紹ク、石頭ハ又青原ニ承嗣ス、其ノ流レヲ扱ダル宗旨ナ呈ニ、毫髪モ違却スベカラズ、斷郎當ニ参スル禅者ワ吾ガ宗旨ニハ依テモツカヌ、宗旨綿々密々深々沈々タル唱ラスベキ者ノワ、平生ノ行迹平生ノ言語、或ハ乱喝胡喝モ、盲枷瞎棒ノタグイ、拳取ルベカラズ、山ヲ抜キ鼎ヲ抜キ、大海ヲ折釵シ、五須弥ヲ躍倒スル底ノ手段モ、平生喫茶喫飯ノ上ニモ有ルベシ、アナガチニ拳ヲ握テ脇下ヲ築キ、足ヲ擡ゲテ劈面ニ来タシ、或ハ威ヲ振テ喝シ或ハ威ヲ振テ棒ス、大クハ邪魔ノ眷属タルベシ、古人万ガ一如レ此ノ見解ヲ具スルヲモ、日本初祖永平道元和尚深ク是レヲナジル、況ヤ後学末代ノ沙門餘智不レ忘、不レ脱ニ識智、從如レ此見解ヲナサバ、入ニ地獄ニ如レ箭ナランノ

ミナラズ、正法ヲ喪尽シ者ノ也、末世濁乱ノ末エニ生ル根器如ニ夢幻ニナラン者ノハ、只古人ノ旧規ヲ守テ坐禅シ、十二時中此ノ叟ヲ会トシ身心脱落スベシ、身心既ニ脱落シツレバ向上向下中道五位君臣偏正回互尽ク通貫セスト云フ無。云云、(1オウ)

とあり、児孫達によつて道元の法孫であることが深く自覚認識されていたことがうかがえる。また、同じく竜泰寺所蔵の門参資料の『仏家一大事夜話』には、

△小施餓鬼之参、師云、先ツ了知シ羊ヲ、云、極無心ノ処テ走、師云、了知シタ心ヲ云イヤク知リ走ヌ、ト云ハ知ツタト云ハ無心デワトモイフ、心ハ、無心ノ処カ法界ノ性佛祖ノ死処、師云、法界ノ性ノ應視シ羊ヲ、云、呈シウドシタハ錯テ走、師云、夫レハ何トテ云無言無説ノ処カ驀最初テ走、意ハ、法界ノ性ト云、最初ノ當リ派ニアルベシ、何トモ伸ラレヌ一物ノ一、師云、小餓鬼ノ時讀マヌ心ヲ云残スガ曹洞宗ノ聯續テ走、云云、(3ウ)4オ)

あるいは、

△鎮守之参、天童如淨禅師云、曹洞有ニ鎮守参禅、未了人洞上、不レ可レ道師、道元和尚從ニ明州津ニ慶徳寺御飯、廿日在居被成此参得了也、故ニ是ヲ廿日婦ノ参ト云、先ツ心得定白山ヲ鎮守トスヘキ、白山ト云ハ自己ノ功也、妙理ト云ハ那時、大権現ハ垂迹ナリ、今時へ出タレトモ権現タト見レバ本位ラバ離ヌ故ニ、白山妙理大権現ヲ其儘曹洞ノ三位トスル、未向定テ於イテ伊勢ヲモ春日ヲモ鎮守ニ勸請スルヘシ、云云、(12ウ)13オ)

等とあり、道元の児孫であると同時に、曹洞宗という自覚も

法孫達には確固として存したことが知られ、こうした事例は枚挙にいとまないほど指摘できる。

玉村氏の御指摘は、確かに曹洞・臨済を包括した林下の特徴を適確に示されたもので、曹洞宗における公案禅受用をめぐる問題についてもすぐれた示唆を与えてくれる。一方、中世社会に生きた禅僧各個人の内証の問題については、決して一般論では包括できないような気もする。彼らには、確固とした自らの立場の認識、道元の法系に連なる、曹洞下の宗旨を伝える児孫であるという自負があったはずである。それら禅僧一人一人についての内証の軌跡は、すべて今後に残された課題であり、禅籍抄物は、この問題に関しても多くの貴重な資料を提供してくれる。

⁽⁹⁾ 本論で取り上げた門参資料を所蔵されている美濃竜泰寺は、応永十四年（一四〇七）峨山派最乗寺開山了庵慧明（一三三七～一四二一）の法嗣無極慧徹（一三五〇～一四三〇）の開創で、無極の法嗣月江正文（～一四六二）も住し、旧地は、犬山の西村氏の居城猿喰城^{さるはむ}であったという。寛正五年（一四六四）月江の法嗣華叟正尊（一四二一～一四八二）の時に至り本格的な殿堂が造営され、文明五年（一四七四）には足利義尚より荘田の寄進を受けて発展した。美濃地方における道元下の曹洞宗寺院としては、関ヶ原今須の峨山韶碩（一二七五～一三六五）開創の妙応寺や、在中宗宥開創の関天徳寺と共に古く進出し

た古刹で、下野大中寺・上野茂林寺・信濃大沢寺等の直末五十一ヶ寺、江戸泉岳寺・長谷寺・下総孝願寺・越後願聖寺・下野傑岑寺等の孫末寺院を含めると、百四十余ヶ寺の末寺を擁する、通幻派の中の了庵派の大本寺格の名刹であり、そして、後出の付表Ⅰの法系表の如く、開創以来現在に至るまで、華叟正尊下の法孫が一流相統して寺灯を掲げてきた、人法・伽藍法一体の寺院である。

三

現在竜泰寺には、禅籍抄物資料としては五点所蔵されているが、この中の一点は、『人天眼目』の抄であり、本論では門参資料のみを問題としたので、今回は『人天眼目抄』については触れない。以下各門参資料について、まず、書冊形式、並びに簡単な解題を付しておく。⁽¹⁰⁾

(イ) 仏家一大事夜話

冊数 一冊

料紙 楮紙

大きさ 縦28・5 cm 横20・5 cm

装釘 袋綴、裏打改装アリ

標題 仏家一大事夜話（内題、仏家之大事）

枚数 表紙・裏表紙共18丁（本文16丁）

行字数 每半葉14行、一行24～35字

刊写 写本

書写年 不明(中世末カ)

筆者 不明

識語 (末尾)「以上十八位当門従秘参へ」

(表紙)「音泰寺常什具」

『仏家一大事夜話』は、勤行・本尊・日中祈禱・放参等の叢林における諸行事、伽藍・什具・弁道具その他の諸事象について、了庵門派独自の解説をなしたもので、その内容目録を掲げれば、次の如くである。

勤行(三時ノ行夏)・禅家ノ本尊・日中(祈禱)・日ノ晩ル々行夏(放散)・四時ノ坐禅・土地神・祖師堂・御影堂・鉢・小施餓鬼・祝聖之参・鍾鼓之参・小開静ノ参・大開静(ノ参)・土地堂(ノ参)・血脉参・命脈参・経教参・鉢ノ参・柱杖之参・扠子之参・楊枝之参・(普通問訊)・五六六蘊参・鬚髮参・鬘袖参・手巾参・襪子参・履ノ参・複子参・傘参・草鞋・四大五蘊・安坐点眼・靈供参・亦靈供・襪子参・竜天参・廿一社順礼参・没后作僧参・中陰破擅参・隔国吊亡靈参・吉方勸請参・悪日連続参・塔婆書后点眼参・塔婆参・念誦参・竜天参・頂相参・持戒参・宗旨駕鸞参・香炉ノ参・坐具参・宗門船参・鎮守之参・白山参・竜天参・念誦参・理趣分参・十三仏参・(第一不動・第二釈迦・第三文殊ノ境界・第四

普賢ノ境界・第五地藏・第六弥勒ノ境界・第七薬師ノ本体・第八観音ノ全体・第九勢至本体・第十阿弥陀本体・第十一阿閼佛ノ心・第十二大日ノ全身・第十三虚空蔵)

これら諸項目を通観して感じられることは、第一に、小施餓鬼・安坐点眼・靈供養・亦靈供・廿一社順(巡カ)礼参・没后作僧参・中陰破擅参・隔国吊亡靈参・吉方勸請参・悪日連続参・塔婆書后点眼参・塔婆参・鎮守之参等の諸項目に見られるように、一般民衆の要求による、追善供養的・祈禱的・神仏混淆的色彩が濃く、鎌倉新仏教が室町期を通じて民衆化・世俗化の傾向で大衆に浸透していた形跡が明確に看取される。

第二に、このような世俗化の形跡を物語る一方において、四時ノ坐禅・鉢・祝聖之参・小開静ノ参・大開静(ノ参)・鉢ノ参・柱杖之参・扠子之参・楊枝之参・鬚髮参・手巾参・襪子参・坐具参等の諸項目のように、純粹に叢林における弁道修行に關係する事象に対するものもあることである。このことは恐らく、前記のものも含めて、これら諸項目が本来個別的な、前に触れた切紙の類のようなものではなかったかという事象を予想せしめる。鉢・襪子参・靈供養・念誦参等が重複していることもその証左とならう。「竜天参」の如きは三回も注釈される。了庵派に伝わったこのような一枚一枚個別の切

紙類が、後に編集されて、今日見られるような冊子にまとめられたものであろう。そして、内容的にも極めて種々雑多なものを含んでいることがこの『仏家一大事夜話』の大きな特徴であるといえることができるが、さらにこのような種々難多な要素を含みながら、しかもそれらが派祖道元あるいはその師如浄に由来帰一するという自覚こそ、実は中世における道元下の曹洞宗の人々の認識の実態ではなかったか。

「楊枝ノ参」には

△楊岐ノ参ニ、如浄□□元和尚ニ問テ云、楊枝会麼、元云、不
会、浄云、我コソ齒クソテ走□□□□ノ入道カ旨ノ垢タソ、入
道ヲホリスツレバ空体ニ叶ソ、空体カ真相体タソ、亦楊枝ヲ□□
ワユレハ□□ノ字タソト云ハ、入道ヲ犯ヌ時中道タソ、楊枝夙在^{ソト}手
ト云モ、指^{サス}我^ツト云□□ト云ハ、我ヲ慚愧シタ^ヨヨ時入道ハ出ヌ
ソ（6オウウ）

とあり、「褥子参」には、

△褥子参、道元和尚帰朝ノ時、從^ニ明州ノ津飯^ニ天童山^ニ廿日留リ
テ参得アル間、褥子^参トモ、廿日飯リノ参トモ云々、（9ウ）

とあり、「鎮守之参」には、

△鎮守之参、天童如浄禅師云、曹洞有^ニ鎮守参禅、未了^ノ人洞上^ノ不^レ
可^レ道師、道元和尚從明州津^ニ慶徳寺御飯^ニ廿日在居被成此参得了也、
故ニ是ヲ廿日帰ノ参ト云々、先ツ心得ハ、定白山ヲ鎮守トスベキ
人、……（中略）：此参禅セスンバ七尺大地エワリ入玉ウト云
也、亦常ニ巡堂ノ時キモ経テモ咒テモ読ンテキツト念ノ両眼ヲフ
サイテ飯ル、此時見余^ノ処ハナイソ、爰ニアル天神七代地五代テ

走、別ニ神カ在コソ、此参禅スル時奇ヲ引ク、イメバイム忌マ
子バイマス神ナルニイムゾ己レカ心ロナリケリ、亦、チワヤフル
吾カ心ヨリ成ス禍ヲ何レノ神カ余所ニ見ルベキ、是レハ元和尚ヨ
リ以来ノ秘参ナリ、不可犯語、（12ウ〜13チ）
とある。ここでは楊枝・褥子・鎮守いずれも道元が如浄より
直接参得したとするのであるが、楊枝については、道元は
『正法眼蔵』（洗面）で、

つぎに楊枝をつかふべし、今大宋国諸山には、嚼楊枝の法ひさし
てすたれて、つたはれざれば、嚼楊枝のところなしといへども、
今吉祥山永平寺嚼楊枝のところあり、すなはち今案なり。（岩波
文庫本中、三〇一頁）

と明記しており、大宋国においても既にすたれてしまったも
ので、道元当時永平寺でのみ使用される「今の案」のものだ
という。また褥子・鎮守については、道元が帰朝の際、天童
山にひき返して二十日間滞在して参得したもので、「廿日帰
ノ参」ともいわれるとするが、道元伝にはそのような事実
は見出し難い。ただし、褥子については、『宝慶記』に、

堂頭和尚、夜話云、元子、爾知在椅子著轆（襪）之也無。道元揖
白云、如何得知。堂頭和尚慈誨云、僧堂坐禅時、在椅子著轆時、
以右袖掩足跡而著也、所以免無禮聖僧也。（岩波文庫本、三二頁）
とあって、褥子について如浄より教示があったことを伝えて
おり、また、鎮守についても、帰朝せんとする前夜、『碧巖
集』を書写せんとし、白衣の老翁大権修利菩薩の助筆によつ

て一夜でその業を終えたが、この白衣の老翁とは、実は日本の白山明神(権現)であつたとする伝承があるので、⁽¹²⁾これらを根拠にして仮託創作されたものと思われる。

所で、『仏家一大事夜話』には、通幻派の中の石屋真梁(一三四五〜一四二三)・竹居正猷(一三九六〜一四六一)師資の語が多数引用されるが、⁽¹³⁾石屋派の門参と了庵派の門参については、長門(山口県)大寧寺末、肥前(佐賀県)武雄市円応寺(了然永超開山)所蔵の多数の門参資料を現在検討中なので、稿を改めて論じたい。また、金田弘氏が解題で指摘される如く、⁽¹⁴⁾末尾の「以上十八位、當門徒秘参人」(17ウ)とある當門徒とは、「坐具参」に、「此参ハ石屋門戸モ了庵門戸モ不_レ差ナリ」とあることから、了庵派、それも竜泰寺系の華叟派のことであり、ここに伝承された切紙類を基盤にして、石屋派や真巖派の門参を参酌しながら再編集したものであろう。

また、一般に道元の大悟の機縁は、如浄膝下における身心脱落であるとされるが、『佛家一大事夜話』では、

△途中ヨリ廿日皈_キ時、道元如何是_レ纒_子ト問エバ、云、^{天童淨}左ト御答
話有_レタ処テ、元大悟タソ、呈ニ、大悟ノ咒ヲ云左_レ右逢_レ源。(6
オ)

という。ここでは大悟の咒なるものも登場する。もとよりこの話がとうてい史実とは思われないが、道元に関係する「襪子参」や「鎮守参」の「廿日帰り参」といわれるものを権威

づけるために、牽強付会に近いことも敢て行うのが切紙の特徴の一でもある。越前(福井県)大野宝慶寺には、寂円の真筆で義雲に与えた法語と伝承される一軸が存するが、これも道元投機の話なるものが引かれている。すなわち、

六祖曰、頂門眼照破四天下、是那箇眼睛。自面前指灯籠露柱云、
聾眼聾耳這箇聾、曰眼々相对頂門眼、心々相投己前心。

永平大仏道投機曰、頭对眉兮、耳对眉。此眼喚作頂門眼、是即正法眼也。一切花老梅樹、是即瞿曇眼睛也。正伝承当此拈頂門眼睛、百億須弥百億日月、无边風月唯沙門一眼睛也、去不尽乾坤灯外灯。亦寂円云、我祖翁此話投機、我亦二十年前涕淚悲嘆箇話当著。眼者惣名也。明一事中円真仏性為也。是我豈恰契悟。觸驢前本来靈照徹昆盧頂顛平。此眼揆開則明々不明。又合則暗々不暗。雖然又不預開合也。或十八眼或六眼或五門、以作頂門眼大哉錯也。雖与麼、其亦不捨莫而已。透徹此話即井驢話三悟道目前真大道正法眼法身呈露。何況其徒亦復開願。非正嫡未曾知之。若不知之、実者学道未弁正邪。奚為分別。深可秘密。未伝授底人不可授之者也。

当山開山真筆深不可入他見。

竜天護法善神百拜

寂円和尚附与義雲和尚

というものである。ここでは道元の投機が、身心脱落でもなければ、まして尻んや襪子に関してでもない、頂門眼・頂門眼睛・正法眼についてなされたことを伝えている。そしてこ

の資料は、末尾の識語まで首尻一貫して同筆であり、従って、寂円の真筆とは認め難いもので、寂円派に伝わった切紙の一であることは明らかである。

『佛家一大事夜話』は、竜泰寺に伝わったこうした切紙類を集大成したものであることは間違いない。またその合糅本的性格は、内容の雑多性、項目の重複となって現われる。彼らには確かに、道元の児孫という認識・自覚は存したが、道元の原点に帰る術は求めようとしなかった。『正法眼蔵』等、道元の主著を容易には閲覧することができなかった時代の制約も存したであろうが、切紙等の室内伝授の秘訣類をもって宗旨のすべてとしていた事実も否定できない。そして、追善供養・祈禱・神仏混淆等の要素も、宗旨の秘訣として受容し、民衆化という名の世俗化に拍車をかけていった事実も見逃すことは出来ない。

以上のような『佛家一大事夜話』の内容から導き出される世界をもって、中世禅界のすべてとするのは勿論早計であるが、中世禅界、就中林下曹洞宗の実態の一端を物語っていることは間違いないであろう。

(口)補陀寺本参為末世記処

冊数 一冊

料紙 楮紙

美濃国竜泰寺所蔵の門参資料について(上)(石川)

大きさ 縦16・4 cm 横47・4 cm

装釘 横帳

標題 補陀寺本参為末世記処

枚数 九紙

行字数 每半葉30行、一行20字前後

刊写 写本

書写年 不明

筆者 不明

識語 (末尾)「無極派別泰叟派本目錄也」(別筆)

巻首に「補陀寺本参為末世記処」とあり、巻末に「無極派別泰叟派本目錄」とあることから知られるように、現在は美濃竜泰寺に所蔵されているが、本来は、無極派の中でも、上州(群馬県)大泉山補陀寺に襲蔵されていた、同寺三世泰叟妙康(一四〇六〜一四八五)の系統に伝承された門参である。このことは、了庵慧明・無極慧徹・月江正文をはじめ、泰叟妙康・天庵玄彭・雲崗舜徳・喜州玄欣・川叟存穎・日州延守・徳翁芳隆等の補陀寺歴代住持の参が引用されていることから明らかである。このほかに、華叟正尊の法嗣大中寺開山快庵妙慶(一四二二〜一四九三)や、喜州玄欣の法嗣、武蔵(埼玉県)竜穩寺七世節庵良筠(一四五八〜一五四一)の参も引用されている。

この『補陀寺本参為末世記処』は、文字通り公案参得の著語の方法を記した門参資料で、補陀寺住持に代々伝承されたもので、これが竜泰寺に所蔵されるに至った経緯は不明であるが、恐らく無極派下の同門派の門参として、同派の交渉の過程の中で伝えられたものであろう。

内容は、「死活上之一句」「牛窓灵」「即心即佛」をはじめとする八十一種の公案や語に対する著語の方法を記したもので、項目を列举すれば、次の如くである。

死活上之一句・牛窓灵・即心即佛・主人公・機倫点処達者猶迷・西来的々意當胸―倒・一之拳処・築破之端的・正當―本来―當テ大悟・応諾下主人公十八年遠侍者喚遠一日不レ應・瑞岩主人公・自性之参・山虚風―門・四哲・知不到・道吾智不到・無縫答(マヤ)・宏智上堂直到空却―生死・拈花―笑・不識上・鷄―下・盤山心月孤円・井駟三関・□□主文

独則文分

仰山雪獅子・空劫已前自己・雲蓋獅子人喫・藥山独牛児生・偏正一致・徳山托鉢下堂・麻谷両錯・玄沙三種病人・見桃花悟道・見明星悟道・擊竹悟道・至道無難・夾山境(マヤ)・青女離魂・百尺竿頭ニ坐シ兼・徳山吸尽三世諸―掛・外道問答・二祖安心・鼈鼻蛇ノ看兼・万古―月再三―得・離四句絶百非西来意五指・六外・子狐之豹・不措

級・藥山坐次石頭問云作甚、山云一物不為・迦葉刹竿・乞児打ニ破飯碗―・徳山点ニ紙燭山―与・目前真大道・平常心是道・元是一精・火炉頭無賓主・馬祖不安・再参・□□餓死・道吾漸源弔慰問答・七賢女屍阨林一母屍々屍這裡―去ト云咒・竹篋背蜀・西来五字・道吾女人拜・婆子勘

破本目錄之内

趙州無・洞山無情説法・仰山雪獅子・空却已前自己・心月孤円光万像照・鐘声七重・古澗□泉・臨才一隻箭・藥山直指人心・夾山境

夜参 三透

案山点頭・犢牛児生・船子夾山・玄沙三白紙・仰山扰子話・水牯牛

この門参に用いられる本則は、即心即佛・無縫塔・徳山托鉢下堂・玄沙三種病人・見桃花悟道・見明星悟道・擊竹悟道・青(倩カ)女離魂・馬祖不安・道吾女人拜・婆子勘婆・趙州無等のよく知られた公案も多数あるが、自性之参・至道無難や宏智正覚の上堂語など、一般の禅語に対する着語も存することが注目される。

この補陀寺の門参は、代々師から弟子へと伝承されたと見られることは既に述べたが、最終的には何時頃の成立と見たらよいであろうか。本文中に引用される参としては、補陀寺

九世徳翁芳隆（一五六三）のものが最も新しいが、最後の「水牯牛」の則のみが別筆で、しかも同じ無極派ではあるが、泰叟妙康の系統とは異なる、華叟派お快庵妙慶（一四二二～一四九三）の語を引用している点などを考えるなら、この部分は後の添加と考えてよいであろう。そして、六世喜州玄欣（一五三六）を除いて、九世徳翁までの歴住の参が例外なく引用されていることを考え合わせるなら、徳翁の法嗣で補陀寺十世の泰州全致（一五八一）の時代をそう下らない時期を最終的な成立の時期と見てよいであろう。

また、月江正文の参がしばしば引用されるが、「即心即仏」の参に、

即心即仏、月江和尚之関本之雑談在初月江ニ見エナサル、時、小原田（1）浦ナント示へ、関本雑談是へ。（1ウ）

とあり、月江には「関本之雑談」なる、まとまった著語集のようなものがあつたことを推定させる。この箇所以外にも、

○万古一月再三得ヲ、代、又手當胸ノ一円相ヲ成シテ両手ヲ展開ス、云著語於云、十ヶ指頭八箇了、云了与レ指諦訛於、代、從縁者始終一不從縁一長堅、云、子細ニセヨ、代、師ノ前ニ至テ、ヒョット立テズイット帰ル、唐人ニ泰叟和尚ノ問セララル、何ニカ大唐ニ繫昌シタル門戸ヲ在ル、云、清郷家斗ソロ在ルガ万古一と□ト云句ヲ云ワセソロウム走ヌト云ノ雑談在（5オ）

とあつて、「雑談」なるものが参照された形跡をうかがうことができる。

所で『補陀寺本参為末世記処』は、典型的な公案参得のため門参である。たとえば洞山無情説法の話については、

洞山無情説法ヲ、学吐久ト坐ノ、良久ノ眠テハヲカチくくト両三度ナラス、師云、其レモヨワイソ、学タムミ打チ手ヲ打ツナリ、徳翁参へ（7オ）

とあり、学人が師家に対して、齒を鳴らしたり疊や手を打って音を出したりすることをもって公案参得としている。禅は機関を尊ぶ宗教である。弘拳棒喝は機に応じ場に臨んで自在なはたらきをなす。しかし、しかしこれを規定してしまつたのでは、禅の形式化・形骸化に外ならず、機関の生命は殆んど失われてしまう。林下の各派では、室町期以降、このような公案解答の口訣を田楽法師・座頭・連歌師・富民商人・医者・武士等の、当時ようやく知的生活を求めるようになった新興階層の参禅者に売却して外護者を獲得していったとされるが、⁽¹⁵⁾かの一休宗純（一三九四～一四八一）が兄弟子の養叟宗頤（一三七六～一四五八）の接化ぶりを、口を極めて非難攻撃するの、⁽¹⁶⁾こうした生命を失つた禅の横行にあつた。このような意味においても、『補陀寺本参為末世記処』は、林下臨濟宗諸派の密参録と主旨を同じくするもので、曹洞宗的な特色は殆んどないといつてよいであろう。

※竜泰寺所蔵の門参資料残り二種については、紙面の関係

上、検討を次回にまわすが、書冊形式については左に記しておく。

(ハ)門徒秘参

冊数 一冊

料紙 楮紙

大きさ 縦27・2cm 横18・1cm

装釘 袋綴

標題 祥雲山龍泰禪寺門徒秘参全 中岩(花押)

枚数 47丁(表紙一丁)

行字数 每半葉11行、1行30字前後

刊写 写本

書写年 慶長十二年(一六〇七)

筆者 龍泰寺十五世中巖正的

識語 「無学和尚白庵」(13ウ)

「花叟派祥雲山龍泰寺本参也」(20オ)

「皆慶長十二年丁南呂拾一日於龍泰精舎衆

寮書了」(40オ)

「皆慶長十二白丁小春吉辰」(48オ)

13ウ)「十則正法眼蔵」(14オ)「祥雲山龍泰禪寺句参透」(22オ)「汾陽十八門」(41オ)「峨山和尚嗣法之次第」(47ウ)の五種よりなる。「快庵派門参」は大中寺に伝わった門参で、華叟派の門参と見なされて一本に編入されたものである。

(ニ)宗門之一大事因縁

冊数 一冊

料紙 楮紙

大きさ 縦26・3cm 横20・4cm

装釘 袋綴

標題 宗門之一大事因縁

枚数 表紙欠・39丁(本文38丁)

行字数 每半葉十二行、一行28字前後

刊写 写本

書写年 慶長十二年(一六〇七)

筆者 龍泰寺十五世中巖正的

識語等 「無極恵徹在判

附与月江正文首座

華叟正尊代々枝深付与正桃々々付与正仙々々

付与正芳々々付与文的畢

祥雲山龍泰寺夜参盤之終也

龍泰寺十五世中岩文(正的)の編集書写にかか
る華叟派の門参類を集めたもので、「快庵派門参」(1オ)

皆慶長十二年未^丁小春吉辰（花押）

（38ウ〜39オ）

無極慧徹・月江正文・華叟正萼（一世）・枝深正孫（七世）・大洞正桃（十一世）・彭山正仙（十三世）・蘭室正芳（十四世）・中巖文（正）¹⁷的と伝承した、無極派の夜参に関する門参で、その意味・起源及び詳細な目録を付している。「快庵一派顯聖寺之出句如是也」（19オ）の語もあり、大中寺の末寺越後（新波県）顯聖寺に伝承された門参も編入されていると見られる。『門徒秘参』と同様に、慶長十二年（一六〇七）に龍泰寺十五世中巖正的によって編集書写されたものである。

四

竜泰寺所蔵の門参資料四種のうち、本論では『佛家一大事夜話』『補陀寺本参為末世記処』の二種についてしか検討できなかったが、『佛家一大事夜話』は同門派の切紙類の集大成で、当時の禅僧達が社会的にいかなる行動をし、いかなる次元で民衆との接触を行っていたかを如実に知ることのできる資料であり、また切紙というものの性格の一端を伺うことのできる資料でもある。また『補陀寺本参為末世記処』は、曹洞宗における公案禅の受用が、林下臨濟宗のそれと全く異なることのない実態の一面を伺い知ることのできる門参である。

注

美濃国竜泰寺所蔵の門参資料について（上）（石川）

（1）禅籍抄物の影印覆刻の主なものには次のようなものがある。

『人天眼目抄』（一九七五年、勉誠社刊）・『松ヶ岡文庫所蔵禅籍抄物集』（第一期、一九七六年、第二期一九七七年、岩波書店刊）・『禅門抄物叢刊』（駒沢大学文学部国文学研究室編、全十五冊、一九七三〜一九七六年、波古書院刊）・『洞門抄物と国語研究』と資料』（金田弘編著全七巻、一九七六年、桜楓社刊）他。

（2）「抄」とは、「鈔」を用いることもあり、元来は、書き写す、抜き書きする意味であるが、室町時代以降、禅僧が漢詩文や禅籍佛書の文意字義等を注釈解説したものを指すようになった。

（3）漢文抄物の曹洞宗関係の代表的なものとしては、鑿山紹瑾の拈提とされる『秘密正法眼蔵』があり、他にも、永平寺義雲が師の寂円の拈提を編集したという形をとる『永平秘密頂王三昧記』（拙稿「義雲編とされる『永平頂王三昧記』について」、『駒沢大学佛教学部論集』第八号、昭和五十二年十月、参照）、道元が入宋中如浄の下で透過したとされる『南谷老師三十四問』等がある。

（4）金田弘「問答体のカナ抄物―中世国語資料としての『密参録』『門参』―」（『国学院大学紀要』第十三号、昭和五十年三月）参照。

（5）玉村竹二「日本中世禅林に於ける臨濟・曹洞両宗の異同―「林下」の問題について―」（上、下、『史学雑誌』五十九巻七号・八号）参照。

（6）道元の禅は、真歇清了（一〇八八〜一一五一）や宏智正覚

(一〇九一〜一一五七)の挙唱した黙照禅の内容と全同ではないが、宋朝禅の二大主流、黙照禅・看話禅のいずれの系統に属するかといえば、黙照禅の系譜に連なることは勿論である。石井修道「宋代禅宗史より見たる道元禅の位置」(『南都佛教』第三十九号、昭和五十二年十一月)参照。

(7) 『正法眼蔵随聞記』(五)には「公案話頭を見て聊か知覚有る様なりとも、それは佛祖の道にとをさがる因縁なり。無所得無所悟にて端坐して時を移さば、即祖道なるべし。古人も看語・祇管坐禅ともに勧めたれども、猶坐をもはたらにすすめしなり。亦話頭に依てさとりをひらきたる人あれども、其れも坐の功に依りてさとりのひらく因縁なり。まさしく功は坐によるべし」「岩波文庫本九八頁」とあり、また『正法眼蔵』(四禅比比)に「佛法いまだその要見性にあらず。七佛・西天二十八祖、いづれのところにか、佛法ただ見性のみなりとある。六祖壇経に見性の言あり、かの書これ偽書なり、付法蔵の書にあらず。曹溪の言句にあらず、佛祖の児孫、またく依用せざる書なり。」(岩波文庫本下、二一五頁)とある、『壇経』批判に見られる見性禅否定の立場、看話禅否定の立場が道元の禅の特色の一とされる。

(8) 玉村竹二前掲論文参照。

(9) 竜泰寺の歴史について従来まとまったものとしては、『過去帳からみた家系譜』(山田右馬之尉正澄公後裔編纂、昭和五十三年九月刊)「第一編 竜泰寺と山田家との関係」がある。

(10) 五点の門参資料については、金田弘氏に簡単な紹介解題がある。『補陀寺本参為末世記処』は『洞門抄物と国語研究』(昭

和五十一年十一月桜楓社刊、三二五頁)に、『宗門之一大事因縁』『人天眼目抄』『仏家一大事夜話』『門徒之秘参』は、『洞門抄物類書目解題・続稿』(『国学院雑誌』第七十八巻十一号、昭和五十二年十一月)にそれぞれ解題がある。

(11) 鎮守参では、白山妙理権現を鎮守とすべきことが記されているが、これとは別にまた白山ノ参があり、これも重複と考えてよいであろう。

(12) 延宝本『建搦記』には、「一、来日可帰朝定給夜、得_二碧岩集壹部_一繕写。鶏鳴之後、白衣老翁来乞_二加助_一、師許_レ之、未到_二明相_一竟書功。和謂_二一夜碧岩是_一、今在賀州大乘寺、師投_レ筆問_二其姓名_一、則云、日域男女元神也、條然失_二其所在_一、因知_二白山明神_一矣、依之今和朝、一宗諸寺院推_二崇之_一、寺中守護奉_レ仰_二鎮守_一也」(河村孝道諸本対校本、二六〜二七頁)とあり、瑞長本『建搦記』には、「来日帰朝ニ定メ給、其夜碧岩集一部百則之公案ヲ書写シ給、至今一夜之碧岩ト是云々、大権修利菩薩助筆シ給イ、灯明ヲ挑ケ給、故ニ今土地神ト安置シ給也」(同上)とあり、面山の訂補本『建搦記』には、「宝慶三年丁亥、日本安貞元年ノ冬天童山ニ告暇ス、……(中略)……ソノ薄暮ニ得_二佛果碧巖集_一手ヲ繕写シ玉フニ、全備スマジキヲ心中ニ憶ルニ、忽チ白衣ノ神人来テ助筆シテ畢ル、コレハ日本ノ白山権現ナリ」(同上、三一〜三二頁)とある。

(13) 『佛家一大事夜話』に引用された石屋派の門参は次の通りである。「△土地神ハ何ント佛法ヲバ守護シタソ、云、解会ノ出ヌ処ヲ守護シテ走、……(中略)……石屋和尚竹居和尚問玉ウ、宅羅尼ハ理度ニ落ヌガ肝要テゴザアルガ、何トテ長ク

ワ御ヨマセアルソ、屋ノ曰、一句道将来、居呈ノ云、曹洞宗守ル処テコザサウナ、屋曰、猶モ細密道イ来レ、云、回互テ走、屋曰、二人ト伝受スルコトナカレ、居云、高声ニ誦ム用所アリヤ、師云、アリ、居云、是何用所ソ、師云、一句道将来、云、煩惱ノ夢ヲ覺ウカ為テ走、屋曰、佛家テハ何ト見ウスソ、云、聞法結縁ノ為テ走」(2ウ〜3オ)「△石屋和尚竹居ニ示ノ云、怠慢ナク勤行スルカ尊客ノ時止ムル心ヲ、云、別シテ走ヤ、屋云、未在更道へ、居云、一仏ノ出世テ走、屋云、好言語々々、」(5オ)「▽四大五蘊ト云フコソアルニ、此ノ話ヲ四大六蘊トワ何ントテ示シタソ」[]「竟ハ四大五蘊□テ走、師云、外ヲ、云、混不レ交類不斉、師云、[]捉不レ□掣□開、師云、此句ノ説破セヨ、云、有ガアルデモナク、無イカ無イテモ走ヌ、師云、真空ノ境界ヲ、云、作一円相、師云、句ヲ、云、万般巧妙一円空、師云、ソノ句説破セヨ、云、佛祖モ衆生モ和尚モ某モ此、一円ヨリ出テ此ノ一円ニ帰メ走、師云、去来ニ不レ度、一句、云、不知不識テ走、師云、畢竟ヲ、学只坐禅□ス、是、石屋与竹居師弟上参へ」(8オ〜ウ)「△安坐点眼参……(中略)……以上举着十八位へ、屋与居へ秘参へ、可秘〜」(8ウ〜9オ)

(14) 前掲金田弘論考注(10)参照。

(15) 前掲玉村竹二論考注(5)参照。

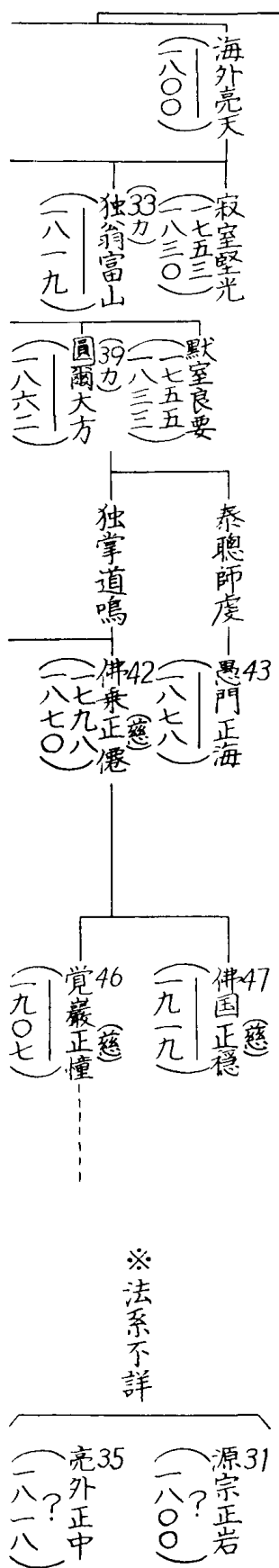
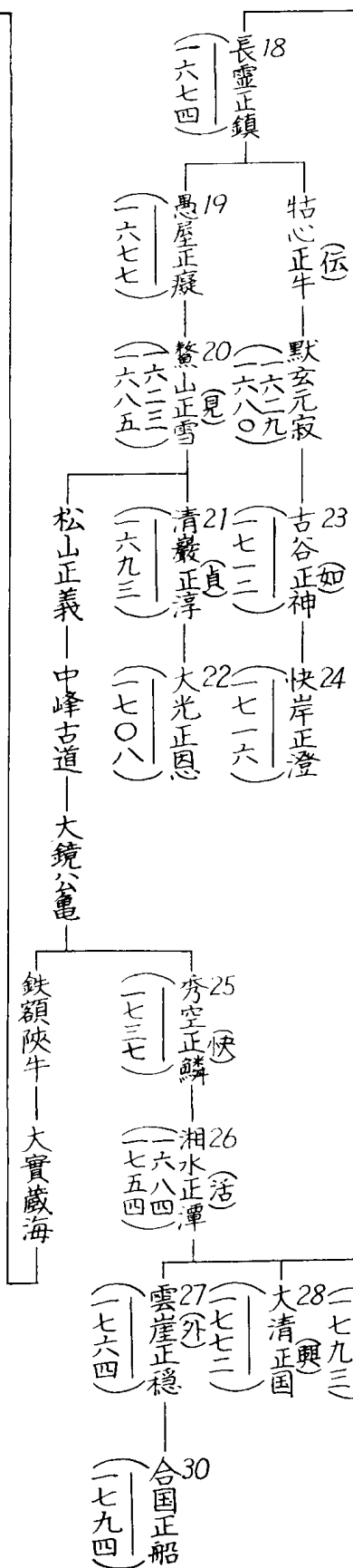
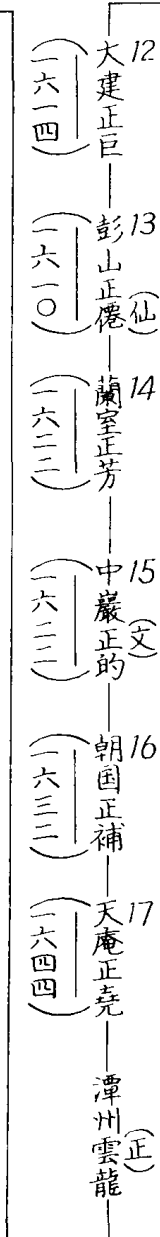
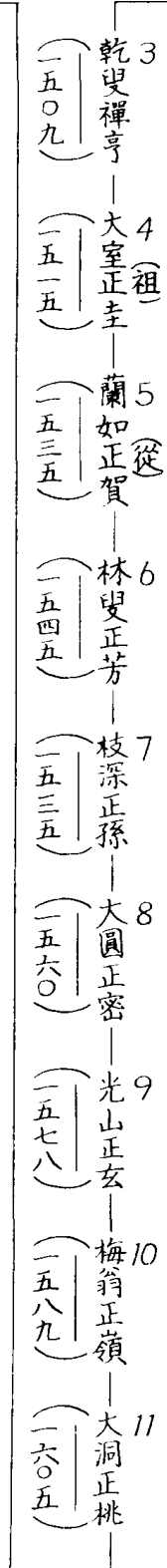
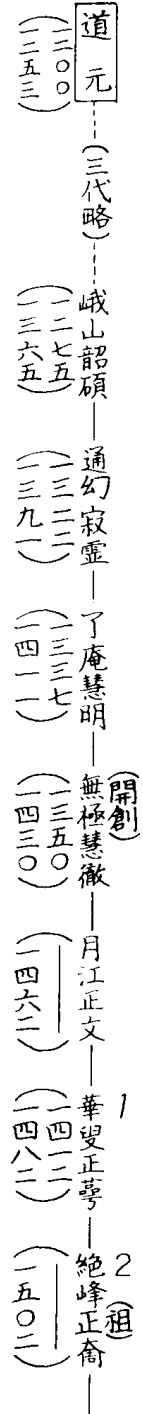
(16) 一休は『自戒集』の中で、養叟の接化を非難して、その内容を五種行に分けているが、その五種とは、一入室、二乘示着語、三臨録ノ談義、四参禅、五人ニ得法ヲオシウ、のことで、そして垂示着語の仕方を記したものが密参録であり、こ

れが曹洞宗でいう門参である。

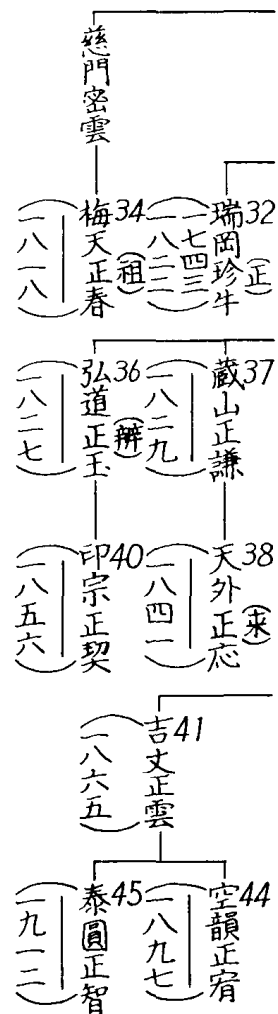
(17) 竜泰寺住持は、開山華叟正尊以来、系字(法諱の上字)に「正」を用いる伝統があり、卷末識語の文的は、十五世中巖正のことである。

付表I 龍泰寺世代法系

(※数字は世代を示す)



付表Ⅱ 龍泰所蔵門參



(※●は補陀寺、○は大中寺世代を示す。(一)『佛家一大事夜話』、(二)『補陀寺本參為末世記』、(三)『門徒秘參』、(四)『宗門之大事因縁』に引用語句及び人名の記載があることを示す。

道元

